

校内別室指導支援員の取組について



不登校生徒の状況

現在、各学年に不登校生徒が複数在籍している。登校し、個別学習のできる生徒、他の教育機関などで学習できる生徒もいる。その反面、家庭から出られず、外出機会の少ない生徒も多い。また要因は家庭環境、友人関係など多岐にわたり、複合要因である場合もある。当該生徒は、小学校からの不登校状態が継続しており、小学校の頃は保護者の送迎で月 1、2 日登校する状態だった。

具体的な取組

○居場所づくり

- ・教室以外の居場所である校内別室を紹介し、教室での活動中、心理的不安が強くなった際はいつでも利用できるようにした。
- ・在校時間を少しずつ伸ばし、部活動等に参加を促し、他の生徒と関わる時間を増やした。

○家庭との連携の強化

- ・校内別室支援員・担任・当該生徒・保護者による面談を行い、学校は生徒理解を深めるとともに、学校・家庭双方で支援の方向性を確認し、役割分担を明確にし、支援の充実を図った。

○学校内での調整

- ・校内別室支援員と担任・学年教員が連携し、時間割等を調整し、別室に通う当該生徒が、放課後に、所属学級の生徒と話す機会を設定した。
- ・登校時間に玄関まで迎えに行く等、信頼関係の構築を行った。

○登校の練習

- ・始業式前日に校内別室への登校を促し、長期休業中の様子などを聞いたり、始業式当日の流れや新学期の予定を話し、心理的不安を解消させた。
- ・新学期に向け、別室支援員・担任と事前に決まり等を確認し、新学期当初からスムーズに学校生活を送れるようにした。

成果

校内別室支援員・学級担任・家庭が連携を図ることで、特性に合わせた、個別最適な支援を行えるようになった。校内別室が学級ではない居場所として、何かあった際は利用できると安心して登校できるため、不登校の未然防止の効果もある。

課題

当該生徒のように校内別室を利用して、教室に戻っていける生徒がいるが、なかなか登校できない生徒への対応が課題である。

生徒のニーズに対応できる校内別室指導



不登校生徒の状況

対象生徒は、友人関係や授業で指名されることの怖さから、登校できない日が多くなり、教室にも入れなくなった。別室には登校できたので、別室登校を続けることで登校日数が増えた。

具体的な取組

○支援員の配置

授業のある日には常に別室支援員を配置することで、生徒は朝から一日、別室に過ごすことができ、特に予約などもない。また、一日の途中の時間から一時的に利用することも可とした。

○校内別室

教室と少し離れた場所に校内別室を設置し、他生徒の影響を受けにくい場所であるため、タブレット端末を利用したりリモート授業やワークブックを活用した自分の学習に取り組めた。

○支援員による支援

別室を利用する生徒のうち、学習に課題がある生徒に対して教員免許をもっている支援員が学習指導を行った。

○ＳＣによる支援

ＳＣの空き時間を活用して、生徒理解やコミュニケーション能力の向上のため別室にて十分な時間を取って交流を行った。

成果

不登校だった生徒が別室教室を利用することで、登校できるようになり、行事への参加を目指して支援員とともに少しずつ教室に入る機会を増やし、行事に参加することで、教室復帰ができるようになった。

課題

別室を利用する人数が増えると個別に対応できる時間が減り、別の対応ができなくなる

生徒に寄り添った別室指導について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生で、中学校 1 年 2 学期から不登校状態になった。不登校の要因としては、学習面への無気力や将来への漠然とした不安感、感情の変動などが挙げられる。

具体的な取組

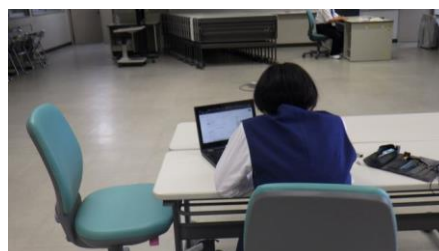
○学習支援①

支援員が当該生徒の希望に沿った学習（特に数学）を支援している。また、音楽にも興味をもっているので、音楽の学習も行っている。

当該生徒が別室を居心地がいいと思えるように、別室の学習環境を整えている。当該生徒のペースで休憩を入れながら学習を進めている。

○学習支援②

当該生徒は、オンライン授業やオンライン教材を活用し、自分の進度に合わせて、学習を進めている。得意な音楽の学習も時々タブレット端末を活用している。



○生徒の様子記録

支援員がその日の生徒の様子を日誌に記入している。また、その情報を運営委員会で共有するとともに、全教職員でも共有している。

日誌を基に校内相談部会で管理職・各学年の担当者・SC等と進捗状況と今後の方向性を確認して、全校体制で見守っている。

○相談できる雰囲気づくり

学習以外に息抜きとして、当該生徒が趣味や興味があること等を支援員に話している。そのことで、なんでも相談できる役割を支援員が担うことで悩み等も相談できる雰囲気をつくっている。

成果

別室指導を通して、週 2 日程度、学習機会の確保ができた。

学習の遅れを徐々に取り戻しつつある。

登校することで、生活のペースを維持することができた。

課題

別室指導の内容を教室での学習と同時にする必要がある。

別室の机の配置等、環境整備を工夫する必要がある。

学習支援教室（別室）の活用について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 3 年生であり、小学校から不登校で中学校に入学した。入学後、環境の変化、人間関係構築の苦手意識から、週 1 回、担任とオンラインで顔を合わせるようになった。

具体的な取組

○給食を食べにおいて

1 年次の 2 学期頃から別室での支援を開始した。給食は好きだったため、登校することができた。

○在校時間を長くしよう

当該生徒が没頭できるアニメのぬり絵を準備。色鉛筆で塗る地道な作業だが、得意分野のためか熱心に取り組んだ。



○友達と関わろう

毎回、給食を残さずに食べ、綺麗なぬり絵をいくつも飾るようになった頃、同学年の生徒が別室利用となった。支援員は当該生徒と新たな仲間とでカードゲーム等を一緒にやろうと提案した。初めは緊張していたが、次第に慣れ、仲間との共通の居場所ができた。



○友だちの輪を広げよう

新しい仲間や支援員との交流から、他人と関わることに自信がついてきた頃、1 学年上の生徒が別室利用となった。そこで一緒にカードゲーム、卓球等で交流を深めたり、一緒に勉強したりするようになった。登校日を増やしたいと相談され週 3 日に変更した。



○興味のある授業に出てみよう

2 年次、支援員と学習を進めた数学や興味のある調理実習、音楽のハンドベル合奏に支援員と一緒に参加した。運動会や合唱コンクールも後方から見学した。

○進学に備えよう

3 年次、放課後学習教室で学習し、別室で面接の準備を行い、校長面接も経験した。



成果

別室利用 2 年間で学習習慣が身に付いた。勉強が分かる、仲間と学ぶなど、学ぶ楽しさを味わうことができた。そして、別室利用の仲間や支援員との人間関係に自信を深め、自己主張したり、不安を抱えても校長面接を受けたりできるなどの成長が見られた。

課題

別室利用の目標であった通常の学級への復帰はできていないが、当該生徒の具体的な目標にすることが課題である。

校内別室指導支援の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、同級生との関係において、人間関係の難しさに悩み、中学校 3 年生の 2 学期からほぼ不登校の状態になった。担任・校内別室指導支援員・SCを中心としたチーム支援を継続したことで、別室でオンライン授業を受けたり、学習したり、進路について担任に相談したりするなど学校に来る意欲が高まり、登校できる日が増えている。

具体的な取組

○不登校生徒への個別対応支援

全ての利用生徒の個別ファイルを作成し、全支援員が情報交換・共有を行い、教材や支援方法の検討を行う。

支援員・担任・SC等が各生徒の支援について話し合い、教育相談委員会で情報共有する。

オンライン授業や学習アプリなどを活用して学習できる環境をつくる。

○校内体制の強化

支援体制の強化として、元養護教諭、学校教育協力支援員、日本語指導員を校内別室指導支援員として配置し、教育相談担当教員が連携の要である。

施設体制の強化として、日当たりが良い静かな教室をカーテンや出入り口の工夫、個人スペース設置や黒板・机の配置の工夫で安心できる部屋にした。

○実践の成果についての普及・啓発

職員会議で生徒の情報共有を行い、状況によっては、校内研修を企画する。必要に応じて外部の教育機関に生徒、保護者をつなぐ。

市内研修で自校の実践を報告し、意見を求める。また、小中連携事業で別室支援について紹介、説明して本校の支援について周知する。

○UDや多様性を取り入れた環境作り

状況に応じて個別学習ができるようにパーティションを活用したり、机の方向を変えたりしている。

UDの考え方を取り入れ、掲示物や黒板に書く情報を最小限にしている。



成果

支援員 7 人がシフト制で勤務し、毎日どの時間に生徒が登校しても対応できるようにしている。現在 17 人の個別生徒ファイルを作成している。不登校生徒者数の割合が、昨年度より減少した。

課題

指導時間や支援内容について学年や保護者によって要望が違うためその対応をしていくことが課題である。

不登校生徒への支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生で、小学校 6 年生の時に、起立性調節障害の診断を受けている。天候の影響などによる体調不良も不登校の要因と考えられる。1 学期は月 1 日程度、2 学期以降は 2 週間に 1 日程度の登校で、行事の日や給食後から登校して午後だけ授業を受けるなどであった。

具体的な取組

○校内体制の強化

特別支援部会が中心となって当該生徒の情報を収集し対応策や支援方法などを話し合い、運営委員会で共有することで、学校全体で一致した取組みを進めている。

○関係機関との連携

当該生徒が自分のペースで学校以外にも登校できるように、教育支援センターや登校支援教室などの関係機関と連携している。また、昨年度から校内別室指導支援員を配置し、月曜日から金曜日まで教室以外で安心して過ごせる場所を設定している。

○ＳＣ等との連携

ＳＣや都の巡回相談心理士からアドバイスを受け、アセスメントを基にした効果的な手だての構築を図っている。

○実践の成果等についての普及・啓発

当該生徒の興味・関心を生かしたり、状態を確認したりしながら自分のペースで取り組めたことを特別支援部会などで共有するとともに保護者に対しても成果や支援の方向性について連絡を取っている。



成果

「別室に行ってもいい」という安心感が定期的な登校につながっている。自身の状態を踏まえ、午後からの登校を目指せるようになっている。週 1 回の家庭訪問で、当該生徒や保護者と情報共有しながら対応できている。

課題

友達同士の関わりを望まない別室登校の生徒が増えた際の環境整備及び不登校生徒の対応に通じた人材確保が課題である。

校内別室支援について

不登校児童の状況

対象児童は、現在、登校してから下校するまでの一日を別室で過ごしている。担任、支援員が主に対応に当たっている。別室では、休養を取り入れながら学習に取り組み、別室を訪れる他の児童とコミュニケーションを取り、過ごしている。保護者とは定期的に面談をし、管理職や専科教員、養護教諭も関わり連携をして対応している。

具体的な取組

○別室での学習支援

別室では、授業の補完として、学習のサポートをしている。

リモートで教室での授業参加ができるように支援している。

当該児童は、プリント、ドリル等の学習に取り組み、テストも実施している。図工や家庭科の作品を制作することにも取り組んでいる。

○別室の環境の活用

トラブルが起こった際に落ち着ける場所としても別室を活用している。

落ち着くことができるように、話を聞き、見守りしている。



○担任、管理職、養護教諭との連携

別室では、児童の不安や悩みを聞き、前向きに教室に戻れるようにサポートしている。担任、管理職、養護教諭と連携を図り対応している。



○別室を生かしたトラブルの再発防止

トラブルを起こした児童の内省を促す場として、別室を活用しトラブルの再発防止を図っている。

担任、管理職、養護教諭と連携を図り、対応している。



成果

別室の登校日数を増やすことができた。別室を利用する他の児童と関わり、コミュニケーションを取り、学習に取り組むことができた。学校生活や行事に対する不安感を軽減させることもでき、宿泊行事に参加し、意欲的に過ごすことができた。

課題

利用児童が多いため、支援員一人では対処しきれない場合の対策について検討し、共通理解する。

教職員の関わりにおける不登校児童への支援について

不登校児童の状況

対象児童は、毎日校内別室に登校し一人 1 台端末を活用した学習等を行って過ごしている。また、担任や養護教諭、管理職、職員の声かけや会話をする中で、給食の時間や、自分に興味がある教科のタイミングを見て教室へ戻り、学級で学習をすることができている。

具体的な取組

○教室復帰のワンクッション

校内に教室復帰までのワンクッションとして校内別室を活用している。教室に入れない時も「登校できた」という自己肯定感をもたせられるようにした。



○チーム支援

生活指導主幹教諭を中心にチーム支援を行うことを確認した。管理職・担任・養護教諭・SCによりケース会議を実施した。ケース会議では、担任からの働きかけ、管理職からの促し、養護教諭の見守り以外にも全教職員での関わりの意識をもつことを確認した。

○人間関係形成力

人間関係形成力の育成を図ることは不登校支援の大きな柱になる。別室登校支援員との会話や悩み事の相談も、教室復帰へのきっかけになっている。安心安全な空間は、当該児童の心の居場所にもなっている。

○教職員の関りと情報共有

校内別室への登校児童の情報を教員間で情報共有し、担任や教職員が校内別室に足を運ぶようにし、徐々に教室復帰の意欲を引き出すようにしてきた。また、様々な教職員が見守っている雰囲気をつくり対応したとで、良い方向に向いていた。

成果

教室に入ることに抵抗のある児童も校内別室という安全な空間を確保し、心理的安全性を確保することができた。その中で様々な職員との接点や自分のペースができたことで、教室への復帰がしやすかった。

課題

支援員が限られた日にしかないことで、登校したい希望日に合わないことがあったため、毎日安心して来られる環境整備が必要である。

校内別室指導支援員による不登校対応体制の整備について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生の夏休み明けから教室へ入ることが不安となり、9 月下旬には別室登校となった。別室登校は、毎日できており国語・数学・英語の個別学習を中心に取り組んでいる。給食を食べて下校することが習慣となっている。

具体的な取組

○生徒の教室以外の居場所の提供

毎日、校内の別室で授業を受けることができるよう支援員の体制を整えている。これにより、教室に入れない時も、教室や保健室ではない別室へと登校し、学習することができるようになった。



○授業の巡回及び観察

当該生徒が、定期テストを別室で受けた際に、テスト監督とは別に見守りとして校内別室指導支援員が同室した。より安心できることや普段と変わらない環境づくりを心がけ対応した。

また、複数の教員を配置することで様々な教職員との関わりをもてるようにした。

○不登校生徒の情報共有

昨年度同様に、勤務開始時刻を生徒の登校時刻よりも前とした。これにより、校内別室指導支援員が担当との打合せをしたり、不登校生徒の情報をまとめた回覧を確認したりしてから業務に入れるようになった。校内別室指導支援員が勤務報告書を記入し情報共有に活用した。

○個に応じた支援

教室に入れずとも、別室に通えている生徒については、当該生徒の希望を確認し、勉強する時間や給食を食べて下校することを望んだ場合には、支援員を配置するなどより柔軟に対応できるよう環境を整えた。

成果

不登校生徒や教室に入ることを苦手とする生徒の校内での居場所を確保することができた。

毎日、校内の別室で指導に当たることができた。

課題

毎日、別室を開くことができたが、午後からは支援員が不在になっていたため、終日の開室を整備する。

校内別室指導支援員を活用した組織的な別室指導について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校6年生に進級後、9月の移動教室が近づくにつれて、不登校となった。親元を離れて宿泊をしたことがないため、保護者と家から離れた土地で過ごすことの不安から、体調を崩すようになった。担任と管理職による面談を継続して行ったが、移動教室への参加と、状況の改善は見られなかった。

具体的な取組

○別室対応による支援

児童用の普通教室は東校舎にあり、反対側の西校舎にはない。そこで、児童の教室がなく、教師の目が行き届きやすい校長室に登校できるよう、環境を整備した。児童の行き来が少ない校内別室を用意することで、当該児童は安心して登校し、過ごすことができるようになった。

○デジタル機器を活用した支援

登校できた日は、一人1台端末を活用し、個別学習を行った。学校での学習の慣れに合わせ、オンラインでの授業参加を行った。さらに慣れたところで、一日数時間、教室で授業を受けることができるようになった。段階的に支援を進めることができるようになった。

○校内体制の強化

学級担任と養護教諭、スクールカウンセラー、管理職が把握している情報を共有し、支援会議を企画した。会議で検討した内容は、全教員で共有し、校内別室指導を行っている。



○不登校児童への支援

学級担任と連携し、保護者へ児童の様子について情報提供を行っている。また、スクールカウンセラーの活用と公的機関について情報提供を行っている。

成果

当該児童は、休みを挟みつつであるが登校を続けている。これは、安心して過ごせる場所があり、校内別室指導支援員が個別に指導を行っているからである。仲の良い友達と関わり、教室で学習しようとする気持ちの高まりが感じられる。

課題

「安心して過ごせる場所」と、「継続的な支援」の提供を続けることが必要である。学校では支援体制を整備しているが、保護者の理解を促しながら、専門機関等との連携を進めることが課題となっている。

不登校児童への支援事例について

不登校児童の状況

対象児童は、不登校が3年以上続いており、学校へ行くことや友達に会うことに不安がある。教職員が当該児童と会うことができないため、管理職を中心に登校できるように関わってきたことから、保護者は管理職と担任との面談を望んだり担任の家庭訪問を求めるようになったりした。当該生徒が給食を食べることを希望したので、組織的な対応により、別室での喫食ができるようにしている。

具体的な取組

○不登校支援対策

- ・支援シート（校内一覧表）を作成する。
- ・保護者と支援について面談を行う。
- ・1か月に1度、支援シートを更新する。
- ・中学卒業までシートを保管する。



○管理職と担任による面談

- ・年度当初に管理職や担任と保護者の面談を行い、校長の経営方針である「児童を幸せにする学校づくり」の理解を促すことができた。また、学校で学ぶことの大切さを伝えた。

○担任による家庭訪問

- ・面談の際に担任の児童に対するメッセージ「担任になった挨拶」を動画で伝えた。
- ・当該児童が会ってみたいとの意思を示したところで家庭訪問をすることを提案した。
- ・月1回、定期的に訪問することができるようになった。

○不登校対応委員会による組織的対応

- ・対応マニュアルは、時系列に具体的に対応すること、伝えることや対応する人を明らかにして、生活指導主幹が作成した。
- ・事前に対応する教職員だけでなく、全教職員に周知した。

成果

- ・不登校対策委員会における児童の実態や状況理解、登校支援の方向性や教員の役割分担の結果、児童の支援がスムーズに行われた。
- ・計画的に担任から複数教員への対応に広げたことによって、コミュニケーション能力の向上につながった。
- ・様々な支援が登校への一歩となった。

課題

- ・今後、登校支援を進めていくために保護者との連絡を密に行っていく必要がある。
- ・担任の負担が大きくならないような校内体制を整備する。